

## 平賀緑 ひらがみどり

緑の情報サイト

～持続可能な食とエネルギー

サイト <http://midori.info/>

メール [hiraga@midori.info](mailto:hiraga@midori.info)

緑のつぶやき <http://twitter.com/#!/hiragamidori>

「検査を受けた肉の割合は恐らく出荷された肉の1%にも満たない」  
99%以上が無検査で出回っているとはっきり言ってくれた。牛肉だけじゃない。福島産だけじゃない。「放射能汚染牛肉が市場に流通—消費者に衝撃」

ウォール・ストリート・ジャーナル日本版 2011年7月13日  
[http://jp.wsj.com/Japan/node\\_272246](http://jp.wsj.com/Japan/node_272246)

日本で「みんなが汚染物を食べていて症状が出てきていることがすごく怖い」  
鼻血と下痢が2点そろえば内部被ばく。病気の花束。チェルノブイリで子どもたちを見てきた野呂美加さんのお話。「福島の線量は高すぎますよね。」

「関東全域で健康被害広がる～500件の異変報告から」OurPlanet-TV 2011年7月19日  
<http://www.ourplanet-tv.org/?q=node/1171>

福島市の子供たちの「10人中10人の尿からセシウム134（半減期2年）、セシウム137（半減期30年）が検出されました。このことは、福島市周辺の子どもたちにきわめて高い確度で内部被ばくの可能性があることを示しています。」

共同プレスリリース 2011年6月30日  
<http://www.greenpeace.org/japan/ja/news/press/pr20110630/>

なのに政府は何をしている？

「東日本大震災：福島第1原発事故 福島18歳以下、生涯検査 36万人の甲状腺」  
事故の精神的影響も調査する「この全県民健康調査の財源は、政府が1000億円規模の基金の創設を検討しており、同調査の一環として行われる18歳以下の甲状腺検査も、それで賄われる見通し」毎日新聞 2011年7月25日

「座長の山下俊一・福島県立医大副学長は『チェルノブイリで20万人の甲状腺検査をしたことがあるが、生涯にわたる検査は世界初で画期的だ』としている」MSN産経ニュース 2011年7月24日

福島の健康調査ほんとに酷い。悪い健康調査は御用学。何もなかったとの結論を出すために使われる。疫学ほど御用学に適しているものはないと言われるくらい、bad plan を書いた方が勝ち。スリーマイルでも同じことがされた。

アイリーン・スミスさんインタビュー 2011年7月8日  
<http://www.ustream.tv/recorded/15859103>

（チェルノブイリの事故の後）「国が本当にいやがっていることは、公衆が汚染の事実を知ってしまうことであり、彼らの本当の防衛線は汚染データを公表しないという点にこそあるのである。（略）大切なことは、放射能汚染の真実を公衆に知らせ、一人ひとりが主体的に汚染と向き合う作業だと私は思う。」 p. 121-122

小出裕章『放射能汚染の現実を超えて』河出書房新社 2011年

「何もないことにして終わらせてしまう以外、知恵がないんですよ」

「子どもたちを放射能から守る福島ネットワーク」代表の中手聖一さんインタビュー  
2011年7月16日 <http://www.ustream.tv/recorded/16010664>

## ■■内部被ばくとは？

内部被ばくは外部被ばくの600倍の被ばくになる！

- ・密な分子切断のためDNA変性確率が高い
- ・空間的密集性・・・局部的に強力に被ばく
- ・時間的継続性・・・外部被曝の数倍のエネルギー

第2次世界大戦後の放射線被曝による死者の数を欧州放射線リスク委員会(ECRR)は6500万人、国際放射線防護委員会(ICRP)は117万人と試算。内部被曝を勘定に入れるか入れないかの違い。

矢ヶ崎克馬『隠された被曝』新日本出版社 2010年9ページ  
 および2011年7月3日講演(<http://www.ustream.tv/recorded/15768461>)より

この内部被ばくが世界中で66年間隠蔽されてきている。

「今日の放射線被曝防護の基準とは、核・原子力開発のためにヒバクを強制する側が、それを強制される側に、ヒバクがやむをえないもので、我慢して受忍するべきものと思わせるために、科学的装いを凝らして作った社会的基準であり、原子力開発の推進策を政治的・経済的に支える行政的手段なのである。」

中川保雄『放射線被曝の歴史』技術と人間 1991年

## ■■店に並んでいる食べものは安全なの？

**「世界もおどろく日本の基準値 2000ベクレル」** ver.3.0

こんなにゆるい日本の暫定基準値

**乳児の基準値**  
 母乳の基準が原形排水基準の2倍?!

**目玉ものの基準値**

アメリカの法令基準	0.111 Bq/L
ドイツガス水道協会	0.5 Bq/L
ウクライナ(セシウム137)	2 Bq/L
WHO基準(ヨウ素131)	10 Bq/L
WHO基準(セシウム137)	10 Bq/L
ベラルーシ	10 Bq/L
国際法 原形排水基準	
ヨウ素131	40 Bq/L
セシウム137	90 Bq/L
日本の暫定基準値(乳児)	100 Bq/L
日本の暫定基準値	
セシウム(Cs-137)	200 Bq/L
ヨウ素(I-131)	300 Bq/L

**ママたちの基準値**

ベラルーシ(子供)	37 Bq/kg
ウクライナ(野菜)セシウム137	40 Bq/kg
ベラルーシ(野菜)	100 Bq/kg
コーデックス(Sr90,Ru106,1131,U235の合計)	100 Bq/kg
アメリカの法令基準	170 Bq/kg
これまでの日本の輸入品規制値	370 Bq/kg
日本の暫定基準値(野菜)セシウム137	500 Bq/kg
日本の暫定基準値(野菜)ヨウ素131	2000 Bq/kg

●正しく知ると子どもたちを守りましょう。  
 \*)コーデックス: CODEX, FAOとWHO共同の合同食品規格委員会

**これで安全ですか？給食大丈夫ですか？**

飲み物の基準値 Bq/L

アメリカの法令基準	0.111
ドイツガス水道協会	0.5
ウクライナ(セシウム137)	2
WHO基準(ヨウ素131)	10
WHO基準(セシウム137)	10
ベラルーシ	10
国際法 原形排水基準 ヨウ素131	40
国際法 原形排水基準 セシウム137	90
日本の暫定基準値(乳児)	100
日本の暫定基準値 セシウム137	200
日本の暫定基準値 ヨウ素131	300

食べ物の基準値 Bq/Kg

ベラルーシ(子供)	37
ウクライナ(野菜)セシウム137	40
ベラルーシ(野菜)	100
コーデックス(Sr90,Ru106,1131,U235)	100
アメリカの法令基準	170
これまでの日本の輸入品規制値	370
日本の暫定規制値(野菜)セシウム137	500
日本の暫定規制値(野菜)ヨウ素131	2000

※コーデックスは8種類合計値

◇Save Child 基準値まとめ「こんなにゆるい日本の暫定基準値」

<http://happy-net.jp/uploader/kizyunti.pdf>

◇ドイツ放射線防護協会「日本における放射線リスク最小化のための提言」2011年3月20日

<http://icbuw-hiroshima.org/wp-content/uploads/2011/04/322838a309529f3382702b3a6c5441a31.pdf>

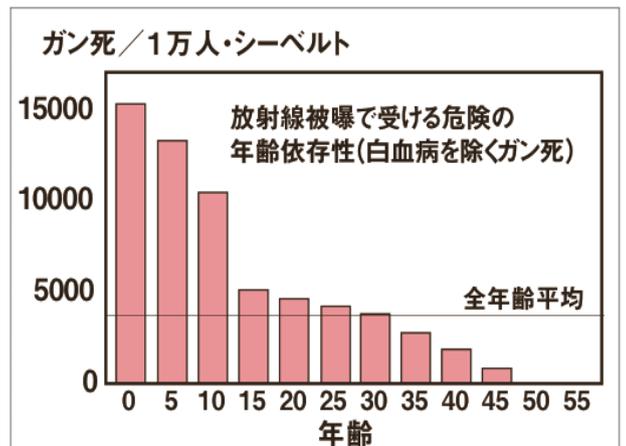
「乳児、子ども、青少年に対しては、1kgあたり4ベクレル〔以下Bq:訳者注〕以上のセシウム137を含む飲食物を与えないよう推奨されるべきである。成人は、1kgあたり8Bq以上のセシウム137を含む飲食物を摂取しないことが推奨される。」

## ■■成長期の増殖の盛んな細胞に対して

放射線障害は非常な危険性を持つ

セイピースプロジェクト「放射線被曝から子どもを守る為に」

<http://www.saypeace.org/image/hibakuyobou.pdf>



## ■■お勧めの書籍■■

緑の情報サイトにて紹介しています。 <http://midori.info/food/>

七沢潔『チェルノブイリ食糧汚染』講談社 1988年

p. 58

87年1月からスウェーデン政府は、トナカイ肉など一部の汚染のきびしい食物に関しては、許容基準値を1キロあたり300ベクレルから1500ベクレルに引きあげた。(略) 結局、1万人のサミのために、そんなお金を毎年使えないということですな。

高木仁三郎、渡辺美紀子『食卓にあがった放射能』七つ森書館 新装版 2011年

p. 47

興味深いのは、食生活に気をつけた人(汚染の高いものを避けた人)と食生活に気をつかわなかった人の汚染度の差が歴然としていることだ。適切な対策の必要性がわかるだろう。

小出裕章『放射能汚染の現実を超えて』河出書房新社 2011年

p. 121-122 (チェルノブイリの事故の後)

国が本当にいやがっていることは、公衆が汚染の事実を知ってしまうことであり、彼らの本当の防衛線は汚染データを公表しないという点にこそあるのである。(略) 大切なことは、放射能汚染の真実を公衆に知らせ、一人ひとりが主体的に汚染と向き合う作業だと私は思う。

矢ヶ崎克馬『隠された被曝』新日本出版社 2010年

松井英介『見えない恐怖 放射線内部被曝』旬報社 2011年

原子力技術研究会編『原発の安全上欠陥』第三書館 1979年

p372 第7章 市川定夫「微量放射線の影響」埼玉大学理学部

人工放射能は、自然に存在する放射能と異なる挙動を示し、生体内に蓄積しやすいのである。それゆえ、どんなに微量でも危険なのであって、われわれは、「平常時」においてもじわじわと殺されているのである。

## ■■お勧めのサイト■■

◇Save Child 子供を守ろう 放射能汚染地図まとめ

<http://savechild.net/map>

## ■■おすすめパンフ (インターネットからダウンロード可) ■■

◇NPO 法人セイピースプロジェクト

「放射線被曝から子どもを守る為に」

<http://www.saypeace.org/image/hibakuyobou.pdf>

◇市民の街「外部被曝」と「内部被曝」パンフ

<http://change2011.blog.fc2.com/blog-entry-11.html>

◇チェルノブイリ救援・中部

「放射線の健康への影響 (第1版一部改訂)」2011年6月9日

[http://www.chernobyl-chubu-jp.org/\\_userdata/ikeda0609.pdf](http://www.chernobyl-chubu-jp.org/_userdata/ikeda0609.pdf)

◇あすのわパンフ「まずは知らなきゃね! 原発ってなに？」

<http://shiga-saku.net/usr/asunowa/mazuhatirasil.jpg>

<http://shiga-saku.net/usr/asunowa/mazuhatirasi2.jpg>



## ■ T P P と今日のフードシステム

- ◇『異常な契約 TPP の仮面を剥ぐ』著者 ジェーン・ケルシー教授による講演会  
「TPP を考える国民会議」掲載の7月14日東京講演動画  
<http://tpp.main.jp/home/?p=625>、<http://tpp.main.jp/home/?p=628>
- ◇ケルシー先生のサイト掲載のPPTスライド“Implications of a TPP for Japan”  
[http://web.me.com/jane\\_kelsey/Jane/TPPA\\_files/Japan%20July%202011%20PPT.pptx](http://web.me.com/jane_kelsey/Jane/TPPA_files/Japan%20July%202011%20PPT.pptx)
- ◇AM ネット TPP 連続学習会「ホントはどうなの？TPP」  
<http://am-net.seesaa.net/>  
TPP 勉強会第5回 amnetosaka 2011年7月13日  
[http://www.ustream.tv/channel/tpp\\_勉強会第5回-110713](http://www.ustream.tv/channel/tpp_勉強会第5回-110713)  
どうするTPP？どうなるTPP？～東日本大震災復興の先に見えるもの～」2011年7月24日  
<http://www.ustream.tv/recorded/16208447>
- ◇「TPPは、しょせんは、アメリカの、アメリカによる、アメリカのための貿易協定に過ぎないのです。」中野剛志『TPP 亡国論』集英社 2011年 p.83
- ◇“Effectively US + 8 countries as any deal must be approved by US Congress”  
アメリカ議会の承認が必要 ジェーン・ケルシー教授講演会 2011年7月14日
- ◇「TPPでどうなる！？ニッポンの医療 私たちの『宝』＝『国民皆保険』を失わないために」  
信州・佐久の内科医 色平哲郎さん講演会 2011年8月4日

## ■ アグリビジネス、フードシステムについて

- 『アジア小農業の再発見』岩崎美佐子・大野和興 縁風出版 1998年
- 『農と食の政治経済学』大野和興 縁風出版 1994年
- 『デブの帝国』グレッグ・クライツァー バジリコ 2003年
- 『食大乱の時代―“貧しさ”の連鎖の中の食』大野和興・西沢江美子 七つ森書館 2008年
- 『ルポ 貧困大国アメリカ』堤未果 岩波新書 2008年
- 『フード・ウォーズ～食と健康の危機を乗り越える道』ティム ラング他、古沢 広祐・佐久間 智子訳、コモンズ 2009年
- 『フード・ポリティクス―肥満社会と食品産業』マリオン・ネスル著 新曜社 2005年

## ■ 世界飢餓の神話

- 世界飢餓にまつわる12の神話  
<http://journeytoforever.org/jp/foodfirst/report/hunger/12myths.html>
- 工業農業にまつわる7つの神話  
[http://journeytoforever.org/jp/foodfirst/agribusiness\\_fetalharvest.html](http://journeytoforever.org/jp/foodfirst/agribusiness_fetalharvest.html)
- 『食糧第一～食糧危機神話の虚構を衝く』フランシス・ムア・ラッペ他 1982年
- 『人間の大地』犬養道子 中央公論社 1983年
- 『食糧テロリズム～多国籍企業はいかにして第三世界を飢えさせているか』ヴァンダナ・シヴァ (著)、浦本昌紀(他訳) 明石書店 2006年

- 『食生活と身体の変遷―先住民の伝統食と近代食その身体への驚くべき影響』  
ウェストン・A. プライス(原著)、片山 恒夫(翻訳) 恒志会 増補・改訂版 2010年
- 『農業聖典』アルバート ハワード (著)、保田 茂 (監訳)  
日本有機農業研究会 2003年

## ■ 適正技術 ～人間中心の技術～

- E. F. シューマッハー 『スモールイズビューティフル～人間中心の経済学』44ページより  
「科学・技術の方法や道具は、安くてほとんどだれでも手に入れられ、小さな規模で応用でき、人間の創造力を発揮させるような、ものでなくてはならない。以上の3つの特徴から非暴力が生まれ、また永続性のある人間対自然の関係が生まれてくる。」

栄養学における先駆者：W.A.プライス博士  
ジャーニー・トゥ・フォーエバーにおける紹介ページ  
[http://journeytoforever.org/jp/text\\_price.html](http://journeytoforever.org/jp/text_price.html)

【原本】"Nutrition and Physical Degeneration" by Weston A. Price, DDS, 1939, 50th anniversary edition 1989, Keats, ISBN 0-87983-502-8

【日本語訳】『食生活と身体の退化—先住民の伝統食と近代食その身体への驚くべき影響』

ウェストン・A. プライス(原著)、片山 恒夫(翻訳)  
恒志会 増補・改訂版 2010年



健康な身体と精神を作るのは何か？ W.A.プライス博士(1870-1948)はそれを明確に示している。1930年代初頭、近代人に広まる虫歯と不健康に心を痛めた博士と夫人はアフリカから南米、オーストラリア、ポリネシア、ヨーロッパ、北部カナダの奥地まで、隔離された未開人社会における食習慣と健康状況を調査しながら世界中を旅して回った。当時は近代文明の影響を受けない社会がまだ存在していた。

プライス博士は「部族の伝統に従って生活し、白人の影響を受けていない」人々を探し求めて、世界各地の辺境の地を訪れている。

人種や民族、食習慣、気候に関係なく、どこに行ってもそれぞれの伝統的な食生活を守っていた人々は「すばらしく健康」だった。物理的に身体が健康であり、虫歯も関節炎も結核も退化性疾患もないばかりでなく、人々は朗らかでたくましく、幸せだった。

ところが同じ部族や家族でも、港や都市に出て「白人の店」から入手した「貿易食（加工食品や近代農法によって生産された作物）」を食べていた人たちの身体はボロボロに退化していた。

近代的な食生活を始めるとその一世代で顔の形を変え健康と免疫力を損なうことをプライス博士は目撃している。

プライス博士はすぐれた科学者であり、かつ慎重な調査者であったため、数千枚の写真と膨大な量の情報を収集している。これらのデータは議論の余地を残していない。私たちは皆、近代食によって身体が退化してしまった犠牲者だ。しかし幸い、博士は損なわれた健康を取り戻すにはどうしたらよいかも教えてくれている。

プライス博士の著書『食生活と身体の退化』は、興味深くユーモアあふれる旅行記でありながら、食事と健康の仕組みを根本から理解するための必読書だ。日本では1978年に片山恒夫先生による邦訳が出版されている。プライス博士は「健康のチャールズ・ダーウィン」といえるだろう。

土と健康 ～有機農業の創始者アルバート・ハワード  
ジャーニー・トゥ・フォーエバーにおける紹介ページ  
[http://journeytoforever.org/jp/farm\\_library/howard.html](http://journeytoforever.org/jp/farm_library/howard.html)



『農業聖典』アルバート ハワード (著)、保田 茂 (監訳)。日本  
有機農業研究会。2003年。ISBN-10:4906640958

『ハワードの有機農業』上・下 人間選書。アルバート・ハワード  
(著)、横井利直 (訳)、日本有機農業研究会。2002年。

ISBN-10: 上巻 4540012649、下巻 4540012657

『The Earth's Green Carpet』 Louise E. Howard, Faber and Faber, 1947

## 土と健康 ～生きた土の世界

(『ハワードの有機農業』における『農業聖典』のまとめ)

1. すべての生物は、生まれながらにして健康である。
2. この法則は、土壌、植物、動物、人間に当てはまる。これら4つの健康は、1つの鎖の環で結ばれている。
3. 最初の環(土壌)の欠陥は、環をつぎつぎと伝わって最後の環、すなわち人間にまで到達する。
4. 近代農業の破壊の原因である広範に広がる植物や動物の害虫や病気は、この鎖の第2環(植物)および第3環(動物)の健康の大きな欠陥を示す証拠である。
5. 近代文明国の人間(第4環)の健康の低下は、第2、第3の環におけるこの欠陥の結果である。
6. あとの3つの環の欠陥は、第1の環である土壌の欠陥に原因があり、土壌の栄養不良な状態がすべての根源である。健康な農業を維持できないことは、われわれが、衛生や住居の改善、医学上の発見で得た利益の全てをだいなしにしてしまうものである。

ひとたびこの問題に関心に向けるならば、われわれが歩んできた道を引き返すことはそれほど困難なことではない。

われわれは自然の指示を心にとどめ、自然の毅然たる要求に従わなければならない。その要求とは、

- 1) すべての廃棄物を土地に還元する。
- 2) 動物と植物とを同居させる。
- 3) 植物栄養に対する適正な保全機構を維持する。  
すなわち菌根の共生を妨げてはならない、ということである。

このように自然の法則に進んで従うならば、農業の繁栄をつづけるだけでなく、われわれ自身、また子孫の健康増進というはかりしれない資産の形で速やかに報酬をうけることになる。